

温かい生活環境を求めて

— ユーモアの大切さ —



日野病院名誉病院長 玉井 嗣彦

やっと秋めいてきましたが、今年の夏は例年にない猛暑で大変でしたね。皆様、体調管理はいかがでしたか。くれぐれもご自愛の上ご活躍下さい。

今回話題の自己風刺のユーモアは、本邦ではなかなか定着しにくいようですが、ヨーロッパには各国の国民性を風刺した小話があります。

例えば、象を話題にしますと、「ポーランド人は、何の関係もないとは思いますが、『象とポーランド問題』について熱烈な演説を行い、愛国者同盟を結成します」などと。

はたして日本人はどうでしょうか。「象を見たら、まず写真を撮るでしょうね」とは、ユーモア研究の第一人者である上智大学名誉教授のアルフォンス・デーケン氏のコメントです。皆様はいかがでしょう。

私は1970年から71年にかけて、アメリカ・ニューオーリンズの市内中心部にあるチューレン大学に、眼科講師として勤務していましたが、スローペースの黒人英語に随分悩まされました。

英会話にはある程度の自信はありましたが、高齢で歯がない黒人男性患者の診療時には何を言っているのかほとんど分からず、途方に暮れて、しかたなく、フランス系アメリカ人の女性アシスタントに助けを求めました。

彼女はしばらく彼の話を聞いてから、「私にもよく分からない」。その時、私は彼女のユーモアのセンスに本当に助けられた思いがしました。

上述のデーケン名誉教授は、ユーモアはジョークと異なり、心と心のふれあいから生まれるもので、相手に対する思いやりが原点にあると述べておられます。「愛の現実的な表現がユーモアである」というわけです。

医療従事者は患者に対して、教職者は学生に、事業主は部下に、あるいは夫婦や親子の間でも、本当に思いやりを示したい時には、まず相手が何を希望しているかに思いを馳せなければなりません。

病院やホスピスの中であれ、教育現場や職場でも、家庭においても、みんなが望むのは温かい生活環境です。その意味で、出発点が思いやりと愛であるユーモアは、自己風刺に根ざしたものとはいえ、ジョークが時に相手を傷つけることがあるのに対して、相手のメンツを壊さないふさわしい表現といえます。

ユーモアのある人とない人を比較すると、ユーモアの乏しい人は風邪を引きやすいというデータがイギリスにあります。予防医学の面からも興味深い報告で、超高齢化社会を迎えた日本で、一番安い薬はユーモアと笑いといえそうです。

3年前、41年ぶりにチューレン大学を訪れる機会を得ましたが、その際、彼女との懐かしいやりとりを思い出した次第です。